RIKKYO MOVE
More Valuable Education
立教大学　大学教育開発・支援センター
Newsletter
Center for Development and Support of Higher Education
21

開催報告

FDワークショップ

問いから授業を組み立てる―効果的な問いとは？―

［2017年11月8日］

学生の思考を促すことに焦点をあて、授業の「問い」をつくることを手がかりに、自分の授業を見つめ直すことを目的として、当センター主催のワークショップを池袋キャンパスで開催しました。

はじめに当センターの山路助教より、本ワークショップの趣旨や目標について説明を行ったのち、原田久氏（法学部教授）より、「行政学」における取り組みをご報告いただきました。2週で1話完結の授業構成―1週目は「問い」の提示にとどめ、2週目は「問い」に関する仮説を提示し、1週空けることで解を求めたがる学生に知的フラストレーションを与える組み立て― とし、仮説を構築し検証することによって、学生の考える時間を最大化させ、各講義のゴールや学問の面白さを学生と共有する場になることを具体的にご紹介くださいました。また、授業で提示する「問い」の内容を検討する際には、「共感性」、「重要性」、「網羅性」の3点を重視していることや、授業外学修時間の増加や発展的な学修につなげることの重要性についてお話いただきました。

原田 久 教授

その後、参加者の担当科目のシラバスを用いてグループワークを行いました。各自が自分のシラバスをみながら授業の問いを考えてそれをグループ内で共有したのち、それらの問いが「共感性」のある問い、すなわち学生にとって解いてみたいものとなっているか、あるいは参加者それぞれの専門分野ごとの「問い」を作る上での課題などについて、フリーディスカッションが展開されました。

最後に山路助教より、1回分の授業の進め方を考える上で役立つ様々な「問い」や授業手法について、「問いの規模」、「内容」、「処理の水準」、「答えの幅」、「正答率」の5つの視点から概観するミニ講義が行われました。学生にいつどのように問いに向き合ってもらうかを考えて「問い」と手法を組み合わせることが紹介されました。

グループワークの様子

お昼休みという短時間のワークショップでしたが、22名が参加し、参加者アンケートでは、「次年度のシラバスに向けて問いを反映させたい」、「問いによる授業をもう一度試してみようという気持ちになった」など「問い」を中心とした授業の実践に対する意欲が高まったという感想が多く寄せられました。また、「学生に『問い』を通してフラストレーションを与えるという観点がよかった」など、事例報告から刺激を受けたといった声や、「分野が異なる先生方のお話でも、共通点があったり、カテゴライズができた」など、グループワークが有意義だったという声も多数いただきました。

山路 茜 助教

ご登壇、ご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

助教　藤澤 広美

※同内容を2018年1月31日にコミュニティ福祉学部FD委員会にて実施いたしました

Rikkyo Education

Rikkyo Educationは、立教大学の各学部で行われている授業実践や教育上の取り組みなどを紹介するコーナーです。第8回となる今号は、社会学部における専門領域の基礎的な講義科目の実践を取り上げます。初年次教育を学部共通で行う社会学部では、必修科目と並行して、初年次から履修可能な専門領域の基礎科目群〈専門教育選択科目Ⅰ〉を設けています。同じ科目群の講義を担当するお二人、井川充雄教授と木村忠正教授に、初年次の基礎的な講義科目ならではの実践の工夫について、対談していただきました。

専門領域の基礎的講義科目における工夫

社会学部メディア社会学科 教授
「メディア社会学」担当　井川 充雄
「メディア・コミュニケーション論」担当　木村 忠正

井川：さて、本日は社会学部で初年次向けに開講している専門領域の基礎科目の実践についてお話しするわけですが、同じ学科でも、なかなか授業についてお話しする機会は得られないので、本日は色々お伺いしてみたいです。僕は立教大学に着任してちょうど10年です。

木村：私は2015年度に着任したので3年目です。

井川・木村：本日はよろしくお願いします。

科目のカリキュラム上の位置づけと役割

井川：まずは、担当科目の役割の確認から始めましょうか。社会学部では2012年度に大きなカリキュラム改革をしました。その1つが学科の壁を越えて初年次教育を共通化して行うことです。カリキュラムの構造としては、1年次で社会学部への着地をめざし、2年次で学科への着地を促します。3年次になると、各学科の中で細分化された専門に分かれ、それを4年次まで継続させ卒業論文を書き上げて卒業します。段々と専門性を高めるカリキュラムです。

学部共通科目の中でも必修とは別に、初年次には「専門教育選択科目Ⅰ」という科目群を設けています。各学科が開講する科目から、学生は自学科と他学科を合わせて12単位の修得が必要です。メディア社会学科で開講しているのは、我々が担当する「メディア社会学」「メディア・コミュニケーション論」の他、「情報社会論」「ジャーナリズム論」を合わせて4科目です。学生は初年次のうちに多様な専門領域の基礎的な知識に触れることで、広い視野と柔軟な発想が養われ、2年次からの専門演習へスムーズに入れるようになりました。

木村：井川先生ご担当の「メディア社会学」は、2016年度のカリキュラム改訂で、「マス・コミュニケーション論」という名称から変更し、4科目の中で一番基本の位置づけになりましたよね。

井川：元の科目はある意味、従来のマス・メディアの代表みたいな位置づけでしたが、科目の名称を「メディア社会学」へと変えるとともに、内容も学科に共通するものへと変えました。メディア社会学科の学生だったら最低限このくらいのことは知っていてほしいという、他の専門科目を履修するときの基礎となる科目の位置づけを「メディア社会学」は担うことになったのです。登録方法も他の科目と異なり、メディア社会学科の1年次生は全員自動登録です。履修者数は

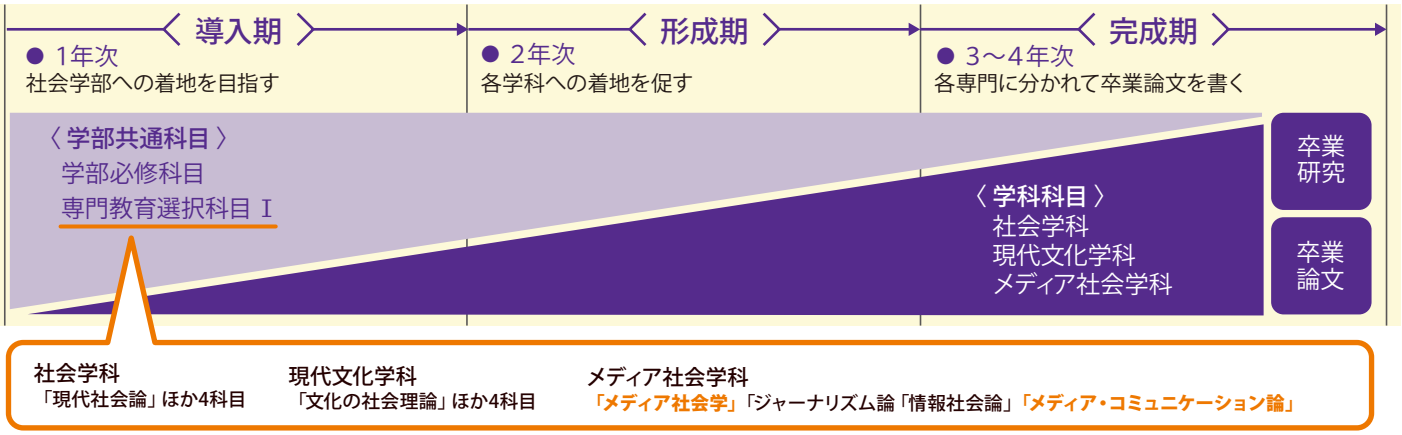


図1　社会学部講義系科目カリキュラムにおける「メディア社会学」「メディア・コミュニケーション論」の位置づけ

300人を超えています。

木村：井川先生の科目は、学科への着地に導く最初のステップであり、私が担当している「メディア・コミュニケーション論」は、同じ秋学期に開講していますが、「メディア社会学」を受けて、より発展的に学習するような位置づけですね。履修者数は270人位で、1年次生が6割程度を占めます。彼らは2科目を並行して学んでいることになります。

科目それぞれの目標

井川：担当科目を考えるにあたって、社会学部に入学する学生は、好奇心はあるけれど、「色々なことが学べそうだから社会学部に来た」というように、最初から専門は決められない、決めたくないという学生が多いので、うまく興味関心を引き出すよう種をまくことが初年次教育の目的だと思っています。

木村：そこは本当に、社会学という学問の良い面ですね。社会学は、法社会学、経済社会学など、文系の学問を横断する面があり、さらには科学技術社会学のように、テクノロジーまで含めて社会を考える学術領域で、学生もあまり狭く自分を枠にはめるという感じではない気はします。ただ、気を付けないとどこに行っていいかわからないまま終わってしまうので、社会学部のカリキュラム上、留意すべき点だと思います。

井川：「メディア社会学」のシラバスは、内容は学科での議論を経て決めました。色々な専門科目の1回目とか2回目に出てきそうな基礎的な概念は全部ここで扱うイメージです。私の本業はメディア史なので、シラバスは歴史的に組み立てていますが、決して過去のことだけを学ぶつもりはなく、現代のメディアと社会に関わる色々な諸問題を考えるための基本的な知識をこの授業では取り扱っているつもりです。

「メディア社会学」担当
井川充雄 教授

木村：「メディア・コミュニケーション論」では、おそらく井川先生が「メディア社会学」で取り上げている大衆社会論やプロパガンダの問題、効果論の話などを復習することでメディア研究、コミュニケーション研究がどのように発展してきたのかを前半でおさらいします。

私自身はインターネット研究が専門ですし、おそらく今の学生にとって、メディアといったとき、マス・メディアではなくソーシャルメディアを中心にしたメディアを指す面もかなり出てきています。そのため、後半はインターネットの研究、オンラインコミュニケーションの研究の観点から社会学、社会心理学の基礎的な概念と、それから新たな社会学の展開を念頭において説明しています。その後3・4年次にゼミ活動をしたり、専門的な授業を受けたりするための基礎的な概念を修得させることが目的です。

授業運営上の工夫

① 資料の提供の仕方

木村：授業のやり方はどう工夫されていますか。

井川：実はある時期まではパワーポイントを使い、それを全部プリントとして配るという懇切丁寧な授業をしていました。ただ何年か前から、意外にそれでは学生は身につかないのではないか、プリントを手に入れただけで勉強した気になって頭には入っていないのではないかと考えるようになりました。今は資料も配りつつ、なるべく板書をするようにしています。授業により積極的に取り組んでもらいたいという思いです。配布資料も、つなぎの言葉がないようにしているので、授業のストーリーを理解するためには聴いて、それを解釈してノートに書かなければなりません。

木村：耳心地がいいとそのまま抜けてしまうので、わかりづらかったり違和感があったりと摩擦を起こさせることが、ある意味教育上では大切な要素になることが良く分かるお話ですね。

私自身は、完全にデジタル化する方向で取り組んでいます。パワーポイントで作った資料を、学生が各自ダウンロードします。このとき、私は1スライドに必ず1つか2つ穴を空けています。授業に出てきちんと見て話を聴いて、自分なりに理解をしてもらうための工夫です。

もう1つのポイントが映像資料の使い方です。10年位前までの学生には、ドキュメンタリーなど40分程度の映像を見せて説明に移行するという、そのようなサイクルで講義を組み立てるとそれなりに効果があった気がします。今はスライドにYouTubeの1～2分程度のものを適宜埋め込んでおき、それを授業内で見せています。そのくらいのサイクルが今の学生に対しては効果的であるようです。

② 学生のリアクションとそれに対するフィードバック

井川：次にお話ししてみたいのは、学生のリアクションをどのように促して、どのように受け止めるか、それをまたこちら側がどのようにフィードバックするかということです。どうされていますか。

木村：学生のリアクションをとる機会を3回程度、Blackboardの「テスト／課題」を使って行っています。1回目は「実際に講義を聴いてみてどうか」や、「どのようなことに関心があるか」をたずね、あとは具体的な課題を与えてそれに対する調査を促します。回答は、選択肢部分と、調べて自分なりの考えを述べる自由記述の部分があります。一括でダウンロードできるので、選択肢部分は集計してフィードバックできます。論述部分もテキストマイニングのツールなどを使えば、どのような言葉がよく使われていたかという形でフィードバックをすることも可能です。

例えばステルスマーケティングについて調べさせると、許せないという学生、仕方ないので使う側のリテラシーだと考える学生、企業側に立って何でもありなのではと考える学生などいましたね。図2は今

年の回答文から描いた共起ネットワークです。これをみるとインスタグラムへの言及も多いですし、「騙す行為」と受け止める意見、企業からみて「必要」や「消費者が見分ける力が必要」といった記述を反映しています。これは驚きであるとともに、学生を把握する上では大切ですし、率直に書いてくれること自体、面白いです。フィードバックが十分かと言われると、さすがに270人の1人1人に回答できないので、集約する形で試みてはいますが、難しいですね。

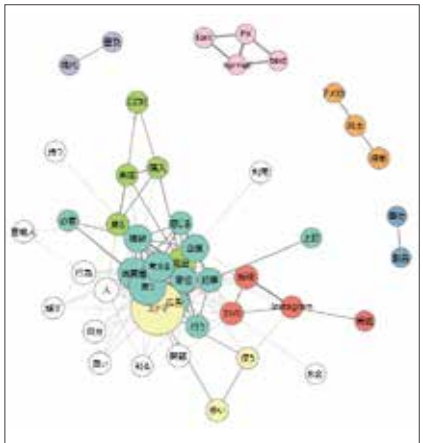


図2　共起ネットワーク図の例

井川：なるほど。オンライン上でテキストマイニングなどの手法を用いて集約するというのは、とても参考になりました。

僕の場合は、リアクションペーパーを使っており、3・4回、紙で授業の最後に書かせています。リアクションペーパーへの記述を求めない回には、授業の最後に問いかけ、学生に発言してもらう機会を設けています。例えばナショナリズムのことを扱った回ならば、「あなたはどういうときに自分が日本人であることを意識しますか」のような、ごく一般的な質問を投げかけます。その日に発言しなかった学生にとっても、他の学生の発言を聴くことは大事だろうと思いますので。発言者は、評価に加味しています。

「メディア社会学」の授業内容は、理論的なことが多いのですが、理論というのは本来、現象をよりよく説明するためのものですから、机上の空論で終わってはいけないと思っています。そこでリアクションペーパーには、その日の授業で取り上げた理論を、現代の事例や自分自身のメディア行動に当てはめて、書いてもらうようにしています。なかには、こちらが思ってもいなかったような発見を記してくれる学生もいて、それは楽しみです。ただ、リアクションペーパーで気になっているのは、学生が単なる出席点と捉えている節があるところです。きちんと書かずにパターン化された表現にそのままあてはめて書くとか、場合によっては代筆が疑われるようなものまでありますね。

木村：代筆はオンラインの場合、本当にわからない世界なので、実際に対面で書かせる方が、その意味では優れていますね。

もう1点、私が工夫しているのは、課題の締め切りです。期限を設けはしますが、越えても駄目にはせず、越えた時点で1日ごとに減点することにしています。期限内に出した学生と期限後に出した学生で差を設ける形で、0か1かではなく一定の連続性で公正な評価となるよう心掛けています。

「メディア・コミュニケーション論」担当
木村忠正教授

③　授業外学習の促進

井川：もう1つお話ししたいことは、授業外の学習時間をどのように確保するかです。僕の場合は授業の特徴からも、毎回何冊かずつ参考文献を紹介しています。特に“古典”と呼ばれるものは本を実際に教室に持って行き、「これは本当に面白いんだ」と力説しています。ただ、本当に学生が図書館に行って本を手に取っているかを確認していないので、そこは懸念されます。

木村：私自身、このような初年次の講義科目は概念やものの考え方、枠組みや研究者など、とりあえず知ってもらうことが主な役目で、学生が内発的に学ぶ側面については演習科目もあわせて考えている部分もあります。ただ、先ほども触れた通り、複数回課題を出すよう心掛けています。その課題では、例えば課題に関連した学術論文・学術書と、オンライン上の資料を調べ、それぞれの出典と書いてあった概要をまずまとめさせます。それを踏まえ、自分なりの考えを500字以内で書かせます。課題それぞれ、おそらく最低でも90分位は使わないとできない想定です。また、最後の試験に向けた学習時間もあるので、総量としてはそれなりに授業外の勉強時間も担保しているのではないかと思います。

最後に　発展的な学習へ

木村：学習時間のお話をしていて、“学習”について思ったことがあります。例えばメディア・コミュニケーション論の観点で考えれば、スマホで色々と検索してみることも一種の勉強になっている面もあります。すると、中長期的には“学習”自体の考え方を柔軟にする必要もあるのではないかと思いました。目標は学生が自分でものを考え判断する能力を高めていくことだと思います。社会学的な知識を身に付けて、社会学のこれまでの研究を活かしながら自分で新たな創意工夫ができるような達成目標があるとすれば、それに向けての“学習”は何も狭い意味での学術だけに限る必要もない部分があるような気もします。

井川：それぞれの研究対象も違って、僕はもともと紙の新聞を研究対象にし、木村先生はオンラインコミュニケーションですよね。だからその辺の捉え方も随分違ってそれが面白いなと思いますね。僕は、せっかくこのように立派な図書館がある大学なので、学生たちには図書館に行って専門書の1冊 ―特に“古典”と呼ばれるような社会学の基礎、今日にとっても意味のあるもの― を、全部読まないにしても目次くらいはぜひ手に取って見るくらいの習慣はつけてほしいと思っていますね。先生からすればそれはアナログでしょうか（笑）。

木村：（笑）。私は書籍を裁断してPDF化し、デジタルで見てしまうタイプです。ただ、不思議ですが、一応表紙は表紙のイメージファイルをスキャンし、デジタル化した本の表紙にしています。表紙にはアイ

コンとしてのインパクトがあって、サムネイルを見るだけでどの本かが直観的にわかります。それはやはり私は紙で育ってデジタルに移民した「デジタル移民」だからそのようなスタイルでいいのですが、先生がおっしゃることを踏まえると、今の学生は幼いときからデジタルが身近な環境で育った「デジタルネイティブ」であるため、アナログがもっている良さ、そこでの蓄積に触れる想像力を養わせることもとても大切なことだと思いますね。

井川：これまでのお話から、それぞれに学生の興味や関心を高めるのに苦労していること、そして授業のやり方は全然違うことがわかりましたが、それは教員のスタイルや方針の違いによりますね。どちらが良い悪いとは簡単に言えませんし、授業のねらいなどに合わせて、ということにもなると思います。

井川・木村：勉強になりました。ありがとうございました。

対談まとめ：助教　山路 茜

左：井川充雄 教授　右：木村 忠正 教授

第1回　立教大学教育活動特別賞を授与しました

立教大学教育活動特別賞は、教育内容や教育方法の工夫・改善により顕著な教育成果をあげた教員の功績を大学として顕彰する制度です。2016年度の教育活動を対象に第1回表彰の選考を行ったところ、文学部、経済学部、理学部、社会学部、法学部、異文化コミュニケーション学部、観光学部、現代心理学部、全学共通カリキュラム運営センター、学校・社会教育講座、ビジネスデザイン研究科、法務研究科から候補者の推薦がありました。選考では主に「学生による授業評価アンケート」の集計結果の一部を用いていますが、他の基準を付加している場合もあります。

表彰された教員の取組みは全学で共有し、本学の教育の向上のために活用していきます。次回の表彰は、2020年度の予定です。

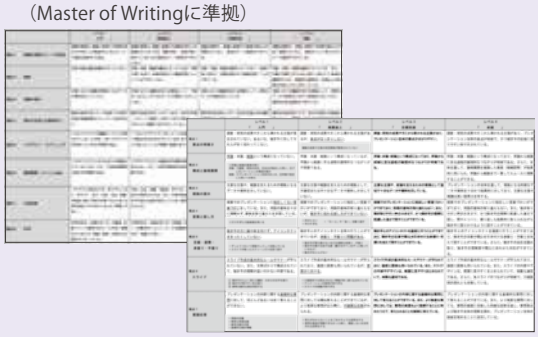
第1回受賞者の一覧は、当センターHPで見ることができます（https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/SitePages/index.aspx）

ルーブリックの活用をおすすめします

ルーブリックとは、学生のレポートやプレゼンテーションを指導する際に、それらのパフォーマンスの質を教員・学生相互によりわかりやすくスムーズに評価して伝えるものです。評価する観点（規準）とそのレベル（基準）をマトリクスで示して作られます。ルーブリックを学生に提示することにより、学生には進むべき先が見えるとともに、レポートや発表の相互評価を行うなど、授業方法の幅も広がることが期待されます。

当センターでは、主に初年次指導向けとして「論証型レポート・ルーブリック」と「プレゼンテーション・ルーブリック」を2015年度に開発しました。専任教職員・兼任講師の皆様が本学の授業において使用される場合に提供しています。これらをひな形として、使用する年次や分野の特性にあわせて改変し、ぜひご活用ください。

▼論証型レポート・ルーブリック
（Master of Writingに準拠）



▲プレゼンテーション・ルーブリック
（Master of Presentationに準拠）

申込先（大学教育開発・支援センター）　**cdshe@rikkyo.ac.jp**

使用されるルーブリックの種類、使用する授業科目名、学部と年次、希望の形態（紙/電子ファイル）を明記して、メールください。

紫縁談義

社会を信頼する力を育てたい。

「映画『かもめ食堂』(2006年)の公開以降、フィンランドの首都ヘルシンキを歩く滞在型の日本人旅行者が増えています。その理由について、自らが映画(DVD等)を鑑賞し、その内容にも触れながら、できるだけ「大げさ」に想像してみて下さい。」

観光学部では2年次からゼミが始まります。来年度2年ゼミの募集で私が1年次生たちに出したレポート課題は、昨今の北欧ブームを意識したものでした。

今年のセンター試験では、「地理B」で「ムーミンの国」フィンランドに関する問題が出て話題になっています。大学のキャンパスでもムーミンのiPhoneケースやマリメッコのポーチが目立ちますし、スウェーデン色のイケアに足しげく通っている学生もいます。最近、テレビでは「ヒュッゲ女子」といった言葉も取り上げられます。デンマーク語「ヒュッゲ」は、たとえば家族や友人と一緒に暖炉の前でゆったりしながら感じる「しあわせ」を指す概念で、そういったライフスタイルやそれを支える社会の在り方への関心が、女性を中心に高まっているようです。人びとは、ムーミンやマリメッコ、イケアの向こう側にも、この「北欧的ヒュッゲ」を想像しようとしているのかも知れません。そして、従来から観光の文脈で謳われてきたキャッチコピー「暮らすように旅したい」が「『かもめ食堂』のように暮らしたい」へとつながった時、北欧旅行は物見遊山にとどまらず、「ライフスタイル(志向)型旅行」の性格も帯び始めます。旅行は日々の生活から遠く離れた「非日常」ではなく、日々の生活の中でも「北欧的ライフスタイル」を意識して取り入れることと、すぐ隣り合わせにある、そんな「日常」重視と両立するものになり得ます。

2年ゼミでは毎年、「私たちがある国や地域に関して持っている情報やイメージ、感じている魅力とは、どのように創られ、どのように広められているのか」といった研究テーマのもと、(異)文化や旅に関する情報発信のプロたちへインタビューを続けています。一昨年の「フィンランドの魅力を伝える人びと」では、フィンランド大使館広報部、三越伊勢丹マーケティング戦略部、Mikon Finland Shop & Café、Finland Café Moi、『北欧雑貨と暮らす』編集部、『LOVE! 北欧』編集部、『地球の歩き方 北欧』編集部、アリスツアー、フィンツアーへのインタビューを敢行しました。

これまで挑戦してきた旅行型テレビ番組(計20番組)のプロデューサーや、ライフスタイル提案型雑誌(5誌)の編集長も含めて、インタビューをお願いしている方々は各界第一線のプロたちで、とてもハードルの高い人たちです。しかし、十分な準備を整えてきっちりとした形式・内容の依頼をすれば、社会は必ず学生たちの意欲に応えてくれます。こうして社会への信頼を抱き、その信頼を力にして、さらに社会へと働きかける勇気と意欲とを膨らませること、そのことがインタビュー実習の隠れた目標でもあります。

観光学部教授
葛野 浩昭(くずの ひろあき)

編集後記

昨年11月より助教を務めております藤澤広美と申します。人的資源管理論、キャリア教育・形成を専門とし、大学生の学習に着目して進路選択自己効力感を高める取り組みについて研究しています。本学の教育改善や学生の学びの質の向上に貢献できるよう教育実践等に関する有用な情報を発信していきたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

「MOVE 第21号」
立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニューズレター
2018年3月7日発行
発行　立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会
〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel:03-3985-4623　Fax:03-3985-4615
E-mail:cdshe@rikkyo.ac.jp
http://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html